



【住 所】東京都目黒区上目黒5丁目33-12

【病院長】立花 新太郎 先生

【病床数】253床(一般215床、療養38床)

【内視鏡スタッフ】常勤医師5名(うち指導医2名、専門医1名)、非常勤医師3名、看護師8名(うち内視鏡技師資格取得者4名)、クラーク1名、助手3名

【内視鏡検査・治療総数】(平成21年度)上部消化管検査 4,142例、下部消化管検査 1,377例、ERCP 85例、上部EMR・ESD 30例、下部ポリペクトミー・EMR 240例、胃瘻造設術 60例、EIS 35例

【保有機器】内視鏡本体 3台、超音波内視鏡本体 1台(上部用ラジアルタイプ 1本、ミニチュアプローブ 1本)、上部消化管用スコープ 13本(うち経鼻内視鏡 9本)、下部消化管用スコープ 4本、ERCP用 2本、内視鏡洗浄機 3台

## 症例実績1万例を誇る 経鼻内視鏡検査のエキスパート

### 地域住民の健康を支える 幅広い診療領域と救急医療を提供



消化器科部長  
吉田 行哉 先生

三宿病院は東京都目黒区の閑静な住宅街にあり、目黒区、渋谷区、世田谷区などの地域住民に対して21の診療科目を提供する総合病院です。病床数253床と中規模ながら、二次救急を含むあらゆる機能を有し、地域に根ざした急性期病院として発展してきました。特に救急医療には力を入れており、脳卒中や心臓発作などの急患を積極的に受け入れています。

昨年8月には消化器科でも日曜昼間の腹部救急を開始し、消化管出血や急性胆道炎などの緊急内視鏡に対応できるよう、専門医と内視鏡診療に精通した看護師各1名を院内待機にしています。消化器科部長の吉田行哉先生は、「救急診療を始めてまだ間もないので、実際に緊急内視鏡が必要な患者様はそれほど多くありません。しかし、近くの病院で休日に専門的な治療が受けられることは、地域住民の安心に繋がると思っていますので、この体制を広く周知させ継続していきたいと思っています」とお話をなりました。



消化器科  
尹 京華 先生



消化器科  
江副 純 先生

### 症例実績1万例に裏付けられた 経鼻内視鏡検査の確かな技術と診断精度

患者様に苦痛の少ない安楽な内視鏡検査を提供するため、三宿病院では平成17年の9月に経鼻内視鏡を導入しました。導入以来、企業や健診センター等からの紹介患者が年々増加し、また一度検査を受けられた患者様がリピーターとなるケースも多く、現在までに累計で1万例を超える、全国でも有数の症例数を誇ります。看護師で内視鏡技師の資格を有する岩永智恵子さんは、「先生が患者様に説明をしながら検査を行うせいか、患者様は気が紛れるようで、以前より落ち着いてスムーズに検査を行える印象です」と、導入後の変化についてお話をいただきました。吉田先生からは、「現在では経鼻内視鏡の画質はかなり良くなりましたが、導入初期は視野角も狭く、経口内視鏡と比べると画質や光量が劣る印象でした。しかし当時から“スコープを近接にしてしっかり確認する”、“スコープ操作はゆっくり行う”などの、経鼻内視鏡特有のテクニックを徹底して検査を行ってきたので、当院における早期癌の発見率は経口内視鏡と比べて遜色の無い結果が出ています(図1)。治療に関しては使用できるデバイスが制限されますが、スクリーニングレベルの検査については経鼻内視鏡で十分対応できると考えますので、当院では上部消化管検査の約80%を経鼻内視鏡で施行しています」とのご説明をいただきました。最近では検査だけでなく胃瘻造設やイレウス管挿入などにも応用しているそうです。

図1：萎縮性胃炎の例における胃早期癌発見率

検査方法	N	腫瘍性病変	%	Odds比	95%CI
経鼻	882	26	2.94	1	
経口	1021	32	3.13	0.94	0.54~1.63

## 医師とコメディカルの強固な信頼関係が 優れたチーム医療の原動力

年間6,000例近い内視鏡検査や治療を行っている内視鏡室では、検査ベッド3台で1日約30例もの症例を実施しています。吉田先生も、「これだけの数の検査や治療は、コメディカルの力がなくてはとても実施できません。スタッフは経鼻内視鏡検査についての知識や理解が深く、効率よく検査を始められるよう適切な前処置を行ってくれています」と、全幅の信頼を寄せておられます。岩永さんは、「経鼻内視鏡は苦痛が少ない検査と言われていますが、麻酔がきちんと効いていないと鼻に痛みが出てしまい、安楽な検査ではなくなってしまいます。そのため、どのスタッフが行っても均一の状態を保てるよう前処置のマニュアルを作成し、常に一定の状態でご患者様に検査を受けていただけるよう気をつけています」とお話になりました。



看護師 内視鏡技師  
岩永 智恵子 さん

内視鏡室では、EMRなどの内視鏡治療においても看護師が直接介助を行い、チーム医療で様々な内視鏡治療を実践しているのも大きな特長です。そのため、内視鏡室に配属された看護師には、岩永さんが指導担当として手技の流れやデバイスの操作などを細かく指導し、チェックリストを使って学習の進捗を確認するようにしています。岩永さんは、「EMRの介助までできるようになることを、内視鏡室担当の看護師の目標として設定しています。時には施行医の先生に情報をもらい、きちんとできているところとまだ上手くいっていないところを確認し、着実にステップアップしていけるよう工夫しています」とお話になり、さらに「当院のスタッフは全員意識が高く、内視鏡室での仕事にやりがいを感じて日々働いています。規模の大きい病院の場合、スタッフに任せられる範囲や領域も限定されるかもしれませんが、当

院では全ての内視鏡検査や治療の介助を経験できるので、非常に幅広い知識やスキルを習得できると感じています」とお話になりました。お二人のお話から、医師との強固な信頼関係がスタッフの意欲を高め、優れたチーム医療の原動力となっていることが伺えました。

## 変化する患者ニーズに対応するため 常に新しい試みに挑戦

三宿病院は脳神経外科が活発な診療を行っているため、院内で依頼される胃瘻造設も年々増加傾向にあります。これに対応するため、同院では今年4月から院内でNSTが稼動しました。内視鏡室からは江副純先生と岩永さんがメンバーに選出され、患者様ごとの栄養剤や水分補給量などを設定や、受け入れ先のスタッフに対する胃瘻ケアなどの指導、器具の取り扱いに関する問い合わせへの対応など、多岐にわたり積極的に活動しているそうです。吉田先生は、「最近では、胃瘻がないと受け入れない施設もあるなど、胃瘻に関する認識は広まってきています。しかし、その患者様にとって胃瘻という選択肢が最適かどうかは、きちんと精査する必要があると考えています。当院のNSTはまだ活動が始まったばかりですが、ゆくゆくは胃瘻そのものの適応を決定し、そのあり方を考えるようなチームになって欲しいと期待しています」とお話になりました。

昨年5月には病院側のバックアップにより内視鏡室のリニューアルが実現するなど、院内での内視鏡室に対する期待も大きくなっているようです。吉田先生は、「現在虎の門病院の飯塚敏郎先生のご指導のもと、胃のESDのテクニックを習得中です。また、CO<sub>2</sub>送気やカプセル内視鏡など、患者様の利益につながるような機器類の導入も検討しているところですよ」とお話になり、地域の中核病院として更なる技術向上と設備の充実を目指し、時代と共に変化する患者様の様々なニーズに応えていきたいと、今後の抱負について語られました。



内視鏡室のみなさん